

- 2 -

＜発表要旨＞ 安南国漂流物語について

和田正彦

江戸時代に安南即ちヴェトナムに日本人が漂流した記録には以下の三例がある。

- (1) 明和二(1765)年に漂流し同四年に帰国した常陸国多賀郡磯原村の姫宮丸の記録
- (2) 第一例と同時期に漂流し共に帰国した陸奥国磐前郡小名浜村の住吉丸の記録
- (3) 寛政六(1794)年に漂流し翌年帰国した陸奥国名取郡閑上浜の大乗丸の記録

この内第三例については既に村松・ガスパルドン女史によって詳細な研究がなされている(M^{me} Muramatsu-Gaspardone; NAMPYŌKI 南漂記. B. E. F. E. O. 33, 1933)ので、第一例並びに第二例を含む漂流記である「安南国漂流物語」について、特に写本の校訂による定本の作成、ヴェトナムの風俗習慣に関する記事(安南国逗留中見聞仕候雑談)とヴェトナム語を記した「安南語」の部分に重点を置いて研究してみた。

先ず「安南国漂流物語」の著者が、帰国した漂流民を引き取りに長崎まで行った水戸の地理学者長久保赤水(1717-1801)であることは、彼の当時の紀行日記である「長崎行役日記」の下関の条に、「このころ毎日東風打つづき、日数八日逗留す。是にて漂流人共にとふて安南記二巻并飄流海上図を作る。」と記されていることから明らかである。

「安南国漂流物語」のテキストは現在のところ写本33種、刊本9種を数えるに至ったが、所謂長久保本を底本として他のテキストと校訂し、一応の定本作成には成功したが、最良の写本と考えられる彰考館本が焼失していたことは残念なことである。

「安南国漂流物語」の内容は、漂流中の模様とヴェトナム滞在中及び帰国までの行動を記した「安南国へ漂流の始末」、ヴェトナム滞在中に見聞した風俗習慣を記した「安南国逗留中見聞仕候雑談」、ヴェトナム語を記した「安南語」の三つの部分からなるが、「安南国へ漂流の始末」の部分は研究の主要目的ではないので省略する。

「安南国逗留中見聞仕候雑談」は、34の短文からなり、ヴェトナムの地理(漂着地マイニチハマ・逗留地会安)・行事(正月のさぎちやう・端午節の競渡・孟蘭盆)・風俗(きんま・葬礼・相撲・お産・育児)・産物(稲作・砂糖・竹・象・果然・蒙貴(共に尾長猿)・孔雀・鷓鴣等)・その他(衣類・暦・剃刀・刀剣・履・雪駄・金銀・銅銭・便所)について記されている。特に漂着地会安の地名比定については、石原道博教授の又安(ゲアン)説には疑問があり、会安(フェフェ)説をとる。又、暦の国号(大越)・年号(景興)が清国(大清・乾隆)と異なり、閏月も清国(七

月)とは異なり日本と同じ(九月)であることから安南は中国の属国でなく独立国であるとの判断を下していることは興味ある記述である。

「安南語」は169語のヴェトナム語の常用単語を、意味を示す漢字・片仮名(小字)とヴェトナム音を示す片仮名が記されている。しかし従来はこの部分についての研究がほとんどなされていなかったもので、169語全部について各々の原語(クォック・グウ)との比定を試みた。しかし169語すべてに相当する原語を見出すことはできなかったが、以下その実例を示す。

一	イチ	モツ	mộ t	酒	サケ	レウ	rdou
二	ニイ	ハイ	hai	飲	ノム	ヲム	uông
三	サン	バア	ba	魚	ウヨ	カア	ca
十	ヂウ	モイ	mười	手巾	テキン	カン	khăn
日	ジツ	ライ	rày	綿	フタ	ボン	bông
月	ゲツ	タン	thàng	笠	カサ	ノン	nón
父	フ	チャア	cha	碗	ワン	バツ	bát
母	ボ	リ	?	在	アル	コウ	có
米	コメ	カウ	gạo	無	ナキ	コン	không

新四軍、阮愛国と泰華僑：1928 - 1941年

市川 健二郎

(ねらい) 華僑郷土の広東・福建地方の中共勢力、ことに新四軍とタイ華僑との親近関係、および東北タイでシャム共産党とインドシナ共産党の統一戦線樹立に努めた阮愛国(ホー・チ・ミン)の業績をまとめつゝ、タイ共産勢力の行動様式にみえる変化と持続、新思想と旧慣行との併存関係を追求したもの。

(内容) 1927年10月、郷土広東省に海陸豊ソビエト区が樹立した時、5名の中共指導者がシンガポールへ赴き、同地の南洋労働連盟とマラヤ革命委員会組織を基盤とした南洋共産党を結成し、また同じ1名がバンコクで同党のシャム特別委員会を創立した。この組織は同年5月の済南事変に際し同胞救済運動を通じて勢力を伸展していった。しかしその組織内容は同郷、同方言、同業者の商店連合体であり、親分・子分間の温情主義、郷土出身者の朋友関係が根強く、労資間階級闘争に